

校本『をられぬみづ』稿 (五)

片 山 享

五十首歌奉りける時

雅経卿

三二七 秋のいろをはらひはてゝや久かたの月のかつらにこ

からしのかせ (六〇四)

あきのいろは紅葉にて、四の句の下に吹といふ詞
のそはり、又結句にならんといふ詞のそはる格也

題しらす

式子内親王

三二八 風さむみ木葉はれ行夜なゝにのこるくまなき庭の

月かけ (六〇五)

夜なゝはこゝにては一夜ゝにの意也、はれゆ
くとあるに「むかへてさむみとはいへり、寒けれ
は空ははるゝ物なれは也」³

殷富門院大輔

三二九 我門のかり田のおもにふす鳴の床あらはなる冬の夜

〔学・ナシ〕

1 紅葉にて―紅葉をいふ也 (野) 紅葉をいふ (乙)

2 四ノ句の下に―四ノ句に (乙)

3 そはり―そへてみるへし (野) そはる格也 (乙)

4 又ゝ格也―ナシ (野・乙)

〔学〕一二ノ句は風の寒きまゝにこの葉のちり行といふ意也。よなゝにはひと夜ゝにの意にて、にもし
いとちからあり、家つとの難はあたらず

1 夜なゝはこゝ意也―野・乙本は文末にくる

夜なゝはこゝにては―夜なゝには (野)

2 はれゆくゝいへり―さむみとはれ行とかけ合 (野)

はれ行とあるにかけてさむみとはいへり (乙)

3 物なれは也―もの也 (乙)

〔学・ナシ〕

1 鳴のにて―鳴といふ意にて (野・乙)

の月(六〇六)

ふす鳴のはふしける鳴¹のにて、今²ふす鳴にはあら
す、しけるのつゝめすとなるにてしるへし、田を
からぬさきにふしたる鳴の床⁴

千五百番歌合に

俊成卿女

三三〇

きえわひてさむる枕にかけみれば霜ふかき夜のあり
明の月(六〇八)

初句さえわひてとある本はうつしひかめたる也、
きとさとよく似たり、きえわひては消入やうにわ
ひしくてといふ意にて、きえは霜の縁²也

通具卿 38

三三一

霜むすふ袖のかたしきうちとけてねぬよの月のかけ
そ寒けき(六〇九)

二の句はよひいたしの句にて、そのかたしきにと
いふ詞のそはる格也、むすふとゝけてとかけあへり

五十首歌奉りける時

雅経卿

三三二

かけとめし露のやとりを思ひいてゝ霜にあとゝふ浅

2 今ふすゝあらずナシ(野)今ふす心にはあらず(乙)

3 ふしたる鳴の床也ゝふしたる鳴をいふ(野)ふしける鳴也(乙) この句「しけるのつゝめ」の前にあり(野・乙)

4 (文末に)「此ふすは現在の意にはあらず」(野)

〔学〕此うたさえわひてといふこといかゝ、もとときえわひてとありしをうつしひかめたるなるへし、きとさともよく似たり、消わひては消入やうにわひしくての意にて、きえは霜の縁なり

1 きえわひてはゝ縁也ゝきえは霜の縁也、きえわひてはきえ入やうにわひしくてといふ意也(野)

2 (文末に)「牀前看月光疑是地上霜 この詩をとりてよめるなるへし」(乙)

〔学・ナシ〕

1 そのかたしきにゝ此袖のかたしきに(野)

2 かけあへりゝかけ合せたり(乙)

ちふの月(六一〇)

露のやとりは月のふるさとにて、霜にあとゝふは
霜にむかしのあとゝふ也、むかしのといふ詞をそ
へてみるへし

橋上霜¹

法印幸清

三三三
かたしきの袖をや霜にかさぬらん月に夜かるゝうち
の橋姫(六一一)

月に夜かるゝは月夜²にかるゝにて、寒ければ月を³
も見ぬ也、四五一二三とつゝけてみるへし

冬の御歌の中に

太上天皇

三三四
冬の夜の長きをおくる袖ぬれぬあかつきかたのよも
のあらしに(六一四)

四五一二三とつゝけてみるへし、冬夜の長きをお
くるは長き夜²のあくるを待さまにて、袖のぬるゝ
はおとのかなくしておつる涙にぬるゝ也⁴

百首歌奉りける時

摂政太政大臣

三三五
笹のはゝみ山もさやにうちそよきこほれる霜を吹あ

〔学・ナシ〕

1 にてー也(野・乙)

2 あとゝふ也ーあとをとふ也(野) あとをとふらふと
いふ意也(乙)

3 むかしのゝみるへしーナシ(野・乙)

1 橋上霜ー橋上霜といふことを(学)

〔学〕月に夜かるゝは寒き故月にうとくなりたる也、
家つとはいたくあやまれり

2 月夜にー月の夜に(野)

3 月をも見ぬ也ー月をみぬ也(野) 月をもみぬよし也
(乙)

〔学・ナシ〕

1 四五一二三ゝみるへしー(さまにて)の次にくる
(野)

2 長き夜のゝにてー夜のあくるを待さま也(野)

3 袖のぬるゝはーあらしに袖のぬるゝは(野・乙)

4 おつるーナシ(野・乙)

らしかな(六一五)

さやにうちそよきはさむくうちそよきに¹て、そよ
きはそよ²くとなるおとをいふ、君こすはひとり
やねなん笹の葉のみ山もそよにさやく霜夜を、こ
の歌のさやくも寒³き意にて、そよは笹の葉のおと
也

題しらす

俊成卿女

三三六

霜かれはそこともみえぬ草の原たれにとはまし秋の
なこりを(六一七)

「

一二三五四とつゝけてみるへし、初句は霜かれに¹
のこゝろ也、そこともみえぬはその所ともみえぬ²
にて、千種の花の咲たりし野ともみえぬよし也、³
下句は秋のいろのなこりはいつこにありと誰にと⁴
はまし、とふ人もなしといふ意也⁵

百首歌の中に

慈円大僧正

三三七

霜さゆる山田のくろの村すゝきかる人なしにのこる
ころかな(六一八)

〔学・ナシ〕

1にてーといふ意にて(野)

2そよくとなるーナシ(野)

3寒き意にてーさむきに(乙)

4笹の葉のーナシ(野・乙)

〔学・ナシ〕

1初句はー初句(野・乙)

2霜かれにー霜かれには(野・乙)

3みえぬーおもはれぬ(野)

4ありとーありやと(野)

5いふ意也ー也(乙)

〔学・ナシ〕

1冬のけしき也ーナシ(野)

冬¹の山²さとのさひしきけしき也

題しらす

西行法師

三三八

津の国の難波の春は夢なれやあしの枯葉に風わたる
也 (六二五)

夢なれやは夢¹なりやにて、²りをれとはたらかした
る也、あしの枯葉の風のおとに夢³のおとろきたる
さまにて、⁴月日はやくうつりかはりたるよし也⁵

題しらす

三三九

さひしさにたへたる人の又もあれな庵をならへん冬
の山さと (六二七)

さひしさにたへたるとは、いへど¹たへられぬまゝ
に庵²をならへて住ん友をほしくおもふよし也

冬歌とて

守覚法親王

三四〇

むかし思ふさよのみ覚の床さえて涙もこほる袖のう
へかな (六二九)

むかし思ふといへるにて、老のねさめなることは
しられたり

2 山さとのーナシ (乙)

〔学〕あしの枯葉の風のおとにゆめのおとろきたるさ
ま言外に聞えていひしらすめてたし

1 夢なりやにてー夢なるかの意にて (野)

2 りをれとー也ーナシ (野)

3 夢のーナシ (野)

4 さまにてーさま也 (野・乙)

5 月日のーよし也ーナシ (野・乙)

〔学・ナシ〕

1 いへどーくちにはいへと (乙)

2 庵をーよし也ー友をほしくおもふよし也 (野・乙)

〔学・ナシ〕

1 いへるーある (野・乙)

百首歌奉りける時

三四一 立ぬるゝ山のしつくもおとたえて槇の下葉にたるひ

しにけり（六三〇）

本歌、あし引の山の雫に妹まつと我たちぬれぬ山の雫に、初句の上に妹まつとゝいふ詞をそへてみるへし、本歌よりひゝきてそはる詞也、たるひは槇のはにたるゝ水をいふ 41

題しらす

俊成卿

三四二 かつこほりかつはくたくる山川の岩間にむせふあか

つきの声（六三一）

一二の句はそのまゝこほりそのまゝくだくるといふこゝろにて、三の句の下に波のといふ詞のそはる格也

撰政太政大臣

三四三 消かへり岩間にまよふ水の沫のしはし宿かるうすこ

ほりかな（六三二）

二三一四五とつゝけてみるへし、消¹かへりのかへ

1 本歌よりゝ詞也―ナシ（野・乙）

2 たるひはゝをいふ―たるひは水なり（野・乙）

〔学〕三ノ句の下に波のといふ詞のそはる歌也

1 にて―也（野・乙）

2 詞のそはる格也―詞をそへてみるへし（野・乙）

〔学〕二三一と句を次第してみるへし、しるしなきね

をもなくかな鶯のことしのみちる花ならなくに、是も三一二とつゝきて同じ格也、一首の意は岩間にまよふみつの沫の消たるあとにまたうす水かむすひてしはし宿かるといへる也、家つとはいたくあやまれり

1 消かへりゝ詞にて―ナシ（野）

三四四

りはそのことをつよくいふ詞にて、消かへりはさ
えはてゝといふに同し、水の沫とす氷とまよふ
と宿かるをかけ合せたる歌也、初句消かへりてと
詞をそへてみるへし

枕にも袖にもなみたつらゝゐてむすはぬ夢をとふあ
らしかな (六三三)

¹二三の句は袖にも涙のつらゝとなりゐての意也、
²つらゝゐて」のゐては物のうこかであるをいふ、
雲のゐるちりのゐる鴨のゐるなとみなその意也、
枕にも袖にも涙氷と結びたれとむすはぬ夢をさま
⁵せとて嵐の吹といふ意也

五十首歌奉りける時

三四五

みなかみやたえゝこほる岩間より清たき川にのこ
るしら波 (六三四)

初句の下にその水上のといふ詞を¹そへて、又三の
句の下になかききてといふ詞を²そへてみるへし、
たえゝこほるはこほる所とこほらぬところのあ

2 かけ合せたる一對にしとれる (野)

3 初句ゝみるへしーナシ (野・乙)

(学・ナシ)

1 二三の句はゝ意也ーナシ (野)

2 の意也ー也 (乙)

3 つらゝゐてゝ意也ーつらゝゐてはこほりゐてといふ
に同し、ゐてはものゝ動かすしてあるをいふ、雲のゐ
るちりのゐる鴨のゐるなといへるにてしるへし (野)

4 涙ー涙は (野・乙)

5 とてーと (乙)

6 嵐の吹といふ意也ーあらしのとふと也 (野)

(学) 初句のやはよひ出しのやにて、下句は水のかれ
かれになりたるさま也、三ノ句の下になかききてといふ
詞をそへてみるへし、天のとをもし明かたの雲間より
神代の月のかけを残れる、これも三ノ句の下にはるか
に見えてといふ詞のそはる歌にて同じ格也

1 そへてーそへ (野・乙)

2 みるへしー意得へし (野)

るをいふ

百首歌奉りける時

三四六

かたしきの袖のこほりとむすほれとけてねぬよの
夢そみしかき(六三五)

二の句の下に心もといふ詞をそへてみるへし、夢
そのそはこゝろのうらへかへるそにて、とけてね
ぬ夜の夢そみしか¹ 41き、ゆめはみしか² 42と冬³
の夜は長しといふ意也

最勝四天王院障子に宇治川かきたる所

太上天皇御製

三四七

はし姫のかたしきころもさむしろにまつ夜空しきう
ちの明ほの(六三六)

二三の御句かたしき衣寒しといひかけさせ玉へ
り、結ひの御句にならんとといふ詞のそはる格也

慈円大僧正

三四八

あしろ木にいさよふ波のおと更てひとりやねぬるう
ちの橋姫(六三七)

〔学・ナシ〕

1 そは―そもしは(野・乙)

2 とけてねぬ夜の―ナシ(野)

3 ゆめはみしかれと―ナシ(野・乙)

4 冬の―ナシ(野)

〔学・ナシ〕

1 二三の御句は―ナシ(野) 二三四の御句は(乙)

2 寒しといひかけさせ玉へり―さむくてまつ夜空し
かるしといふ意也(乙)

3 結ひの格也―結ひの御句の下にいかにかにわひしから
むといふ詞をそへてみるへし(野) かるしのつゝめ
ぎとなるにてしるへし(乙)

〔学〕あしろ木にいさよふ波のおとの更たるは寒夜の
さま也、三ノ句の下にこの寒き夜にいふ詞をそへてみ
るへし、家つとの難はあたらす

三の句の下に此きむき夜にといふ詞のそはる歌也

百首歌の中に

式子内親王

三四九

みるまゝに冬はきにけり鴨のゐる入江のみきはうす

こほりつゝ¹(六三八)

三四五一二とつゝけてみるへし、²うす氷つゝはう

すこほり」しつゝにてしもしをはふける詞也

湖上冬月

家隆卿

三五〇

しかの浦や遠さかりゆく波間よりこほりていつる有

明の月(六三九)

本歌、小夜ふくるまゝにみきはや氷るらん遠さか

り行しかのうら波、¹みきはの氷るまゝに波のおと

のとほくなり行也、三の句の下にかけもといふ詞

をそへてみるへし

五十首歌に

俊成卿

三五一

ひとりみる池のこほりにすむ月のやかて袖にもうつ

りぬるかな(六四〇)

やかてはそのまゝといふ意也。²袖³にもとあるにも

〔学〕結句のつゝいかゝ、体語よりつゝとつゝくことはなきこと也、是はうすこほりしてとありしをうつしひかめたるなるへし、こほりしてこほりつゝ文字よく似たり

1つゝして(野)

2うす氷つゝは―結句は(乙)

うす氷つゝは―詞也―五の句のつゝとある本はわろし(野)

(学・ナシ)

1みきはのゝ行也―氷る故に波のおとの遠さかりゆく也(野・乙)

1五十首歌に―守覚法親王家五十首歌に(学)

〔学〕袖にもは袖の水にもといふ意にて、池の水を袖にひたしたるにも也、袖の水は涙をいふ

2いふ―(野)

3袖にもゝつくへし―袖にもとあるにもに心をつけてみるへし(野)袖にものにもといふに心をつけてみるへし(乙)

に心をつくへし、袖の水にも意にて氷といふことは上句よりひゞきてそはる詞也、そでのこほりは月のあはれにて落るなみたのこほる也」⁴²

題しらす

後徳大寺左大臣

三五二 夕なきにとわたる千鳥波間よりみゆる小嶋の雲にきえぬる（六四五）

ゆふなきは風のなきひる夕をいふ、二の句はよひいたしの句にて、その千鳥はといふ詞のそはる格也、きえぬるは消ぬらくにてらくはもつのむすひ辞也、らくのつゝめるとなるにてしるへし

五十首歌奉りける時

摂政太政大臣

三五三 月そすむ誰かはこゝにきの国や吹あけの千鳥ひとり鳴なり（六四七）

二三の句は誰かはこゝにきてといふ秀句也、此きての下にみんといふ詞をそへてみるへし、是は初句よりひゞきてそはる格也、千鳥ひとり千鳥ばかりといふ意也

4 袖の水にも詞也―袖の水にもといふ意也（野）袖の水にもといふ意に聞ゆる也（乙）
5 月のこほる也―袖の水は涙をいふ（野）そでのこほりは月のあはれにこほるゝ涙のこほるをいふ（乙）

〔学・ナシ〕

1 二の句は格也―二の句の下にその千鳥はといふ詞のそはる格也（野）二の句の下にその千鳥はといふ詞をそへてみるへし、例のよひよし出しの句也（乙）
2 らくはもつのむすひ辞也―也（野）はもつの結び也（乙）

〔学・ナシ〕

1 二三の句は誰かは―ナシ（野）二三の句は（乙）
2 といふ秀句や―といひかけ玉へり（野）といふ秀句にて（乙）
3 此きての―きての（野）此句の（乙）
4 みん―此月をみん（野・乙）
5 詞をそへてみるへし―詞のそはる歌也（乙）
6 是は格也―前後のひゞきにそはる詞なり（野）上下のひゞきにそはることはとしるへし（乙）

千五百番歌合に

秀能¹

三五四

さよ千鳥声こそちかくなるみかたかたふく月に汐や
みつらん(六四八)

かたふく月に汐のみちきて、潟には千鳥のをられぬ故に立さわきて、なるみの里ちかく鳴くるをいふ、二三の句はこゑこそちかくなれといふ秀句なり、れとるはかよふにてしるへし

最勝四天王院障子に鳴海潟かきたる所

秀能

三五五

風ふけはよそに鳴海のかたおもひおもはぬ波になく
千鳥かな(六四九)

片思に潟思ひをそへたり、千鳥は潟をおもへとなみはおもはて潟によりかくる故に片思ひ也、風のふけは思はぬ波のよりきて潟にをられぬ故よそになる千鳥の潟をおもひてなくといふ意也」43

通光卿¹

三五六

浦人の日もゆふくれになるみかたかへる袖より千鳥

1 秀能―季経朝臣(学) 季能(野・乙)

〔学〕汐のみちくるまゝに千鳥のこゑの沖より浦へちかつく意也といへる家つとの註はとりかたし、是は汐のみちきて干潟のなくなるまゝに千鳥の立きりきて里ちかくなきをいふ

2 みちきて―みちて(野)

3 故に―故(野)

4 二三のしるへし―ナシ(野)

5 いふ―なるみへいひかけたる(乙)

〔学・ナシ〕

1 そへたり―かねたり(野)

2 千鳥は―片思ひ也―ナシ(野)

3 風の―風(野)

4 潟にをられぬ故―をられぬまゝに(野) 干潟にをられぬ故(乙)

1 通光卿―通光朝臣(学)

〔学〕此歌二三四五と句を次第してみるへし、下帯の道はかた／＼わかるとも行めぐりてもあはんとそおもふ、此うたも同じ格にて、初句は四ノ句へかゝれり、袖よりは袖にの意にて、此ことくはしくは恋部にいへり、袖に千鳥のなくはいとさむけなるけしき也

なく也（六五〇）

二三一四五をつゝけてみるへし、袖よりは袖にの
意なり、此ことさきにいへり、袖に鳴は袖に声の
落くるさま也³

女御入内御屏風に

季経

三五七

風さゆるとしまか磯のむら千鳥たちは波のこゝろ
也けり（六五一）

波の心なりけりは波の心¹にありけり也、に¹あの
つゝめなとなるに¹しるへし、波のたては千鳥もた
ち、波のゐれは千鳥もゐる物なれは、たちは波
の心也けり²といへる也

五十首歌奉りける時

雅経卿¹

三五八

はかなしやさてもいく夜かゆく水に数かきわふるを
しのひとりね（六五二）

本歌、行水に数かくよりもはかなきは思はぬ人¹を
おもふ²なりけり、初句をさてもとうけて行水に
数かきわふるはおもはぬつまをこひわふるといふ³

2 此ことさきにいへりナシ（野）

3 さま也ーをいふ（野）にてさむきさま也（乙）

〔学・ナシ〕

1 波の心なりしるへしナシ（野）

2 けりとーとは（野）と（乙）

1 雅経卿ー雅経朝臣（学）

〔学〕本歌、ゆく水に数かくよりもはかなきはおもは
ぬ人をおもふなりけり、この歌より行水に数かくはお
もはぬ人をおもふといふことになれり、又秋の野の笹
わけし朝の袖よりもあはてこし夜そひちまさりける、
この歌より笹わくるといへば人にあはてかへることに
なるも同じことにて、此たくひあまたあり、されは三
四五の句はおもはぬつまを恋わふる鶺鴒のひとりねとい
ふ意なり

2 うけてーうけて下へつゝけたり（野）うけたり（乙）

3 こひー思ひ（乙）

意也、秋の野に笹わけし朝の袖よりもあはてこし
 夜をひちまさりける、此歌より笹わくるといふこ
 との人にあはぬことになると同じ格にて、みな本
 歌よりうつりてしか聞ゆる也、をし鳥はあしにて
 水をかくものなれは水に数かくとはいへり、数か
 きわふるは数かきわふらんにて、いくのかゝりを
 らんと結へる格也、らんにつゝめるとなるにてし
 るへし

百首歌に

式子内親王

三五九 さむしろの夜はの衣手さえ／＼てはつ雪しろし岡の
 への松（六六二）

上句さむしろの上にかたしく夜はの衣手さえ／＼
 てあくれはと詞をそへてみるへし、初句のものし
 と三の句「44のでもしにその心をいひのこしてし
 か聞せたる格也

雪¹をよめる寂蓮²

三六〇 ふりそむるけさに人のまたれつるみ山の里の雪の

4也—（の次に）本歌よりうつりてしか聞ゆ（野）本
 歌のうつりてしか聞ゆ（乙）

5野に—野の（野）

6いふことの—いへは（野）

7ことになると同じ格にて聞ゆる也—ことゝなるに
 同じ（野）ことになると同じこと也（乙）

8をし鳥は／＼しるへし—ナシ（野）

9いくのかゝりをらん—いくをらん（乙）

10結へる格也—むすへり（乙）

〔学〕さむしろの上にかたしくよはの衣手さえ／＼て
 と詞をそへてみるへし、四ノ御句いひしらすめてた
 し、夜の明たるさま也

1雪をよめる—入道前関白右大臣に侍りける時、歌合
 雪（学）

2寂蓮—寂蓮法師（学）

〔学〕家つとに初句ふりそめしとあるへきことなりと
 いはれたるはいかゝ、此歌は三ノ句のつるといふか過
 去の詞なれば、ふりそめしといひては中々にわろし

タくれ(六六三)

初句をふりそめしといはぬは³三の句をまたれつる
と過去にいへれは也⁵、ふりそむるけさに人のま
たれつるみ山⁶のさとの雪のタくれはいと⁷さひし
くて、いよ／＼人のまたるゝといふ意也

雪のあした後徳大寺左大臣のもとにつかはしける

俊成卿

三六一

けふはもし君もやとふとなかむれはまた跡もなき庭
のしら雪(六六四)

けふはもしみ¹なからに君もやとふとの意也

かへし

後徳大寺左大臣」

三六二

今そ聞こゝろはあともなかりけり雪かきわけて思ひ
やれとも(六六五)

一四五二三とつゝけてみるへし、今そ聞は今君か
歌にてきゝしれりといふ意也²、二の句心にはとに⁴
もしをそへてみるへし

3 いはぬは―過去にいはぬは(乙)

4 三の句を／＼いへれは也―三の句につるとあれはなり
(野)、三の句につるといふ辞のあれは也(乙)

5 ふりそむるゝまたれつる―ナシ(野) ふりそむるけ
さに人のまたれつれば(乙)

6 み山の―下句み山の(野)

7 いとゝさひしくて―ナシ(野・乙)

8 いふ意也―也(野)

〔野〕頭書「つるは過去也」

〔学・ナシ〕

1 みなからに―雪故に(乙)

〔野〕雪故にけふはもし君もやとふとなかむる也

〔学・ナシ〕

1 後徳大寺左大臣―ナシ(乙)

2 也―ナシ(野)

3 二の句―二三の句は(野)

4 とにもしをそへてみるへし―跡もなきものなりけり
といふ意也(野) あともと詞をそへてみるへし(乙)

百首歌奉りける時

定家卿

三六三

駒とめて袖うちはらふかけてもなしさ野のわたりの
雪の夕くれ (六七二)

本歌、くるしくもふりくる雨かみわの崎さ野のわ
たりは家もあらなくに、四五一二三とつゝけてみ
るへし、上句は¹やとからん家はさら也、駒とめて
袖うちはらふはかりの木かけたになしといふ意に³
て、本歌の雨を雪にかへ家を木かけにかへてわひ
しき心をつよく聞せたり⁵

山家の雪といふことを¹

三六四

まつ人のふもとの道はたえぬらん軒はの杉に雪おも
るなり (六七二)

初句²まつ人のくべきといふ詞をそへてみるへし

伏見里の雪といふことを¹

有家卿

三六五

夢かよふ道さへたえぬくれ竹のふしみの里の雪の下
をれ (六七三)

三四五一二とつゝけてみるへし、ふし見²は夢のよ

〔学・ナシ〕

1 上句はゝ意にて―野本は末尾にある

2 やとからん―雪にやとるへき (野・乙)

3 にて―也 (野・乙)

4 かへて―聞せたり―かへられたり (野)

5 つよく―ふかく (乙)

1 山家の雪―山家雪、定家朝臣 (学) 山家雪 (野・乙)

〔学〕初句の下にくへきといふ詞のそはる歌なり

2 初句まつ人のくべきと―初句の下にくへきと (野)

〔学・ナシ〕

1 伏見里の雪といふことを―ナシ (野・乙)

2 ふし見は夢のよせにて―ふし見は夢のよせなり (野

・乙) (野本は「用にたてたりの次に)

せにてくれ竹はふしみの枕詞なるを用にたてたり、夢かよふ道さへたえぬといへるにて、伏見³の道の雪⁴にたえたることはしられたり、雪の下折のおとに夢のさめたる也⁵⁶

家に百首歌よませ侍りけるに

前関白太政大臣

三六六 ふる雪にたくものけふりかきたえて淋しくもあるか

塩かまの浦（六七四）

あるかはあるかなのこゝろ也

五十¹首歌に

俊成卿

三六七 雪ふれは嶺のまさかきうつもれて月にみかける天の

かく山（六七七）

ゆきふれはみとりなる嶺のさか木も白妙にうつもれて、又その雪²を月にみかけると也³

題しらす

小侍従

三六八 かきくらしあまぎる雪のふるさとをつもらぬさきに

とふ人もかな（六七八）

3 伏見の―伏見の里の（野）

4 雪に―ナシ（野）

5 おとに―竹のおとに（野）

6 也―よし也（乙）

〔学・ナシ〕

〔学〕みとりなりし天のかく山の雪にうつもれてしろたへになりたるうへを、又月にみかける也、家つとの説はあたらす

1 五十首歌に―ナシ（野・乙）

2 雪を―雪を又（乙）

3 也―といふ也（乙）

〔野〕雪ふれは嶺のさか木も白妙にうつもれて也、四の句はゆきの上を、又月にみかける也

〔学・ナシ〕

1 初句くわろし―ナシ（野）

2 天きる―なれは也―ナシ（野・乙）

三六九

庭の雪に我あとつけて出つるをとはれにけりと人や
みるらん（六七九）

慈円大僧正

三七〇

閑居のさま也、初句もしあまりなれと此程の風調
にて耳たゝす、此格西行法師の歌に多し」46
なかむれはわが山のはに雪白しみやこの人よあはれ
ともみよ（六八〇）

なかむれは我すむ山のはにふれる雪白し、都の人
よとはすともあはれとはみよといふ意也

雪のあした大原にて

寂然法師

三七一

尋ねきて道わけわふる人もあらじいくへもつもれ庭
のしら雪（六八二）

四の句つもらはいくへもつもれと詞をそへてみる
へし

3 かきくらしーナシ（野）

4 道のー道も（野・乙）

5 はかりにーほとに（野）

6 としられたりーとは聞えたり（野）とはしられたり

（乙）

〔学・ナシ〕

1 此程の風調にてー此集の頃のしらへにかなひたれは
（乙）

2 此格／多しーナシ（乙）

〔野〕 閑居のさま也、夜の雪になといへるもしあまり
は此集のころの歌のしらへにかなひたれは耳たゝす

〔学・ナシ〕

1 とはーと（野）

2 いふ意也ー詞をそへてみるへし（野）

〔学・ナシ〕

〔野〕 四の句いくへなりともつもらはつもれの意也
〔乙〕 四の句つもらはいくへなりともつもれの意也

百首御歌の中に

太上天皇

三七二

此ころは花も紅葉も枝になししはしなきえそ松のしら雪(六八三)

花もちりもみちもちりて枝になしと詞をそへてみるへし

千五百番歌合に

通具卿

三七三

草も木もふりまかへたる雪もよに春まつ梅の花のかそする(六八四)

雪もよのも¹しはのにかよふもにて、雪の夜にと²いふに同じ、春まつ梅はさ月まつはな立花といへるも同じ意にて春さく梅といふ意也、春を待こころにはあらず、⁵これは寒梅の歌なるへし

鷹狩の心を

公衡

三七四

かりくらしかた野の真柴をりしきて淀の川せの月をみるかな(六八八)

昼は狩に心をやりて、¹夜は月に心をなくさむる也

〔学・ナシ〕

〔野〕二三の御句は花も紅葉もちりて枝にはなしといふ意也(頭書)降雪はきえでもしはしとまらん花も紅葉も枝になきころ、同じ意なれとしらへはいたくことなり

〔乙〕三の御句枝にはなしとはもしをそへてみるへし、後撰にふる雪はきえでもしはしとまらん花もみちも枝になき頃、此うたと同じこころ也

〔学・ナシ〕

1 もしはとは(野)

2 に同じし意也(野)

3 同じ意にて同じきにて(野)

4 春さく梅といふ意也―春になりて咲梅といふこと也

(野)

5 これはなるへし―くさも木もふりまかへたる雪の夜に春になりてさくへき梅の花のかくするといふ意にて寒梅のころ也(野)

6 なるへし―也(乙)

〔学・ナシ〕(野・注文ナシ)

1 やりて―なくさめ(乙)

2 夜は―よる又(乙)

百首歌奉りける時

三七五

日数ふる雪けにまさる炭かまのけふりもさひし大は
らのさと(六九〇)

雪¹けの雲を炭かまのけふりとみなしたる也、けふ
りのまさるはにぎはしき²ものなるを、³これは雪け
の雲のけふりとみゆるなれはさひし⁴といへる也

歳暮¹に人につかはしける 西行法師² 47

三七六

おのつからいはぬをしたふ人やあるとやすらふほと
に年のくれぬる(六九一)

おのつからはたま³といふ意にて、したふとい⁴
ふにかゝれり、いはぬをはとへともいはぬをの⁵意
にて、やすらふ⁶ほとには待⁷ほとにといふに同じ、
老⁸たる身の人にいとほる⁹よし也

俊成卿女

三七七

へたて行世々のおもかけかきくらし雪とふりぬると
しのくれかな(六九三)

へたて行はへたより行にて、¹たりをちとつゝめて

(学・ナシ)

1 雪けの雲をしたる也―雪けの雲はけふりに似たるも
のなれは、雪けにまさるけふりとはいへり(野) 雪け
の雲はけふりによく似たるものなれはけふりとみなし
たる也(乙)

2 ものなるを―ことわりなるを(野)

3 これはみゆるなれは―雪けにまさる故に(野)

4 と―とは(野)

1 歳暮に―年のくれに(学)

(学) 初句はたま³の意也、一首の意はとへともい
はぬを、たま³したひくる人やあるとまつほどには
やとしもくれたりといへるにて、人にうとまるゝ身を
ななく意はおのつから聞えたり

2 ける―侍りける(乙)

3 といふ―の(野・乙)

4 いふに―いふ(野)

5 の意にて―也(野)の意也(乙)

6 やすらふほとには―やすらふは(野)

7 待ほとに―まつと(野)

8 老たるよし也―ナシ(野)

9 よし也―こゝろ也(乙)

(学・ナシ)

1 たりをちとつゝめて―たりのつゝめちとなるを(野)

てとはたらかしたる詞也、三四の句かきくらしか
きくらしして我身も雪とふりぬると詞をそへてみる
へし、⁶降ぬるに旧ぬるをそへたり

百首歌奉りける時

小侍従

三七八 おもひやれば八十のとしのくれなれはいかはかりか
はものはかなしき（六九六）

二三四五一とつゝけてみるへし

題しらす

¹西行法師

三七九 むかし思ふ庵にたきゝをつみおきてみし世にも似ぬ
年の暮かな（六九七）

二の句うき木とある本はたをうとうつしひかめた
る也、³もしよく似たり、山家⁴歳暮には年木⁵とて春
の用意に薪をこりてつみ置也、⁶みし世はよ⁷をのか
れさりしほとをいふ心、⁸やすき山家のとしのくれ
のさま也

¹撰政太政大臣

三八〇 いそのかみふる野の小笹霜をへてひと夜はかりにの

・乙

2 三四の句―三の句の下に（野）三四の句は（乙）

3 かきくらしかきくらしして―かきくらしして（野）

4 我身も雪とふりぬると―わが身はといふ（野）わが
身は雪とふりぬると（乙）

5 みるへし―意得へし（野）

6 降ぬるに―そへたり―ナシ（野）

〔学・ナシ〕

〔野・注文ナシ〕

1 西行法師―ナシ（学）西行（野・乙）

〔学〕此歌水辺ならてうき木といへること似つかはし
からず、もとたき木とありしをうつしひかめたるには
あらずや、うとたと文字よく似たり、年木といひて春
の用意にたきゝをこりつむか山家のならひ也、西行法
師の歌にはかゝるふり多し

2 たを―ナシ（野）

3 もし―うとたと（野）

4 歳暮には―としの暮には（野）

5 とて春の用意に―といひて（野）

6 つみ置也―つむもの也（野・乙）

7 よをのかれさりしほとをいふ心―出家をせぬさまの
世をいふ（野）

8 やすき―さま也―ナシ（野）

こる年かな (六九八)

霜をへては日をへての意也、又年をふることをも
いへり、ひとよは笹の縁²にて、ひと夜はかりにく
れのこる年かなと詞をそへてみるへし」⁴ 48

慈円大僧正

三八一

年の明てうき世の夢のさむへくはくるともけふはい
とはさらまし (六九九)

初句としての夜の明てと詞をそへてみるへし、年²
の

□は大としの夜にて、けふは大晦日をいふ、下句

年はくれぬとも此⁴けふをはいとはさらましといふ
意也

百首歌奉りける時

入道左大臣

三八二

いそかれぬ年のくれこそあはれなれ昔はよそにき
し春かは (七〇一)

いそかれぬは年用意もせて春をまたぬをいふ、下²
句は春のくるをむかしは今のやうによそには聞ざ
りしをといふころ也

〔学・ナシ〕

1 摂政太政大臣―摂政 (野)

2 縁にて―縁也 (野)

3 ひと夜―下句ひとよ (野)

4 みるへし―意得へし (野)

〔学〕家つとにいとふといふことを難しられたるはく
るともいとはさらましとつゞけて見られたる故也、み
れはくるともけふはいとはさらましとあれはくると
をいとふといふ意にはあらず、けふをいとはさらまし
といふころ也

1 みるへし―意得へし (野)

2 年の―夜にて―ナシ (野・乙)

3 くれぬとも―くるとも (野)

4 此―ナシ (野・乙)

〔学・ナシ〕

1 せて―いふ―せぬといふ意也 (野)

2 下句は―聞ざりしを―下句むかしはよそに聞し春か
は今は春のくるをもよそに聞身となれり (野) 下句と
しはくれぬともけふをはいとはさらまし (乙)

歳暮¹の心を

後徳大寺左大臣

三八三

石はしるはつせの川の波まくらはやくも年のくれに
けるかな(七〇三)

波枕は川の中にある石をいふ、石²はしるとあるに
てしるへし、上句ははやくといはん³有心の序に
て、さら／＼ととこほる所なく⁵つゝきたれはい
かにもはやう年のくれたるやうに聞えたり、あし
引の山鳥のをのしたり尾の長し夜をひとりかも
ねん、此歌は枕詞⁷をさへそへて上句を長くとつゝ
けたれは、いかににも夜の長きやうにおもはれて、
同じ格の有心の序歌也

三八四

老の波こえける身こそあはれなれことしも今はすゑ
の松山(七〇五)

上句は老の年波をあまたこえける身こそあはれな
れといふ意¹にて、下句は又ことしも今は末²になり
たりといふこゝろなり

寂蓮

「 49

1 歳暮の心を―ナシ(学)

〔学〕波まくらは石にあたりて波の高くなるをいふ、
はやくといはん料にて、旅泊の歌に波まくらといへる
とは意ことなり

2 石はしるとあるにてしるへし―滝枕ともいへり(野)
さるからに石はしるとはいへるなり(乙)

3 有心の序―序(乙)

4 さら／＼ととこほる所なく―とこほる所なくさ
ら／＼と(野・乙)

5 つゝきたれは―いひくたしたれは(野)

6 はやう年の―年のはやう(乙)

7 此歌は―これは(野・乙)

8 枕詞をさへそへて―ナシ(野)

〔学・ナシ〕

1 意にて―意(野)

2 今は―もう(乙)

3 なりたり―なれり(野)

有家卿

三八五 行としをゝしまの海人のぬれ衣かさねて袖に波やか
くらん(七〇四)

ゆくとしをゝしむといひかけて、波に涙をそへた
り、かさねては衣の縁²にて、もとよりぬれたる上
に重て也

俊成卿

三八六 けふことにけふやかきりとおもへとも又もことに

あひにけるかな(七〇六)

けふは大晦日¹をいふ、けふことにけふやかきりな
らんとおもへとも又もことのけふにあひにける
かなと詞をそへてみるへし、や²のかゝりをらんと
むすへる格也、

をられぬ水二の巻終

「

〔学・ナシ〕

1 いひかけてゝそへたり―いひかけたり(野)

2 縁にて―縁也(野)よせにて(乙)

3 もとよりゝ重て也―波になみたをかねたり(野)

〔学・ナシ〕

1 けふは大晦日¹をいふ―ナシ(野)

2 やのかゝりゝ格也―ナシ(野・乙)